

2012年1月8日
於 南山大学人類学研究所 1F 会議室

共同研究「モノ、コト、時間の人類学：物質文化の動態的研究」

公開研究会

技術をモノ語る民族誌の苦悩と悦楽

民族誌家や人類学者は、意識的であるか否かにかかわらず、調査地でさまざまな技術を目にしているといえる。というのも、現地の人びとの社会的営みは、日々の糧を得る生業・生産活動から儀礼や祭祀などといった象徴的行為に至るまで、「知識」や「技能」に基づく技術の実践と見なしうるものだからである。しかし反面、人類学や民族誌研究の技術に対する理解や興味は、近年まで多分に否定的な意味合いを孕む「時代遅れのテーマ」と見なされてきたため、どうしても古典的な範疇を超えるものではなく低調といわざるをえない。

いっぽう、近年、ブルーノ・ラトゥールの議論などに触発され、モノと人間を同列なアクターとして位置づけ、「モノ」と「人間」——あるいは「社会」と「自然」——がないまぜになった「ハイブリッド」の世界を描こうとする試みがにわかに注目を集めている。とすれば、「モノ」と「人間」が相互に働きかけ合う回路の一つである技術は、決して「時代遅れのテーマ」などではなく、むしろ「ハイブリッド」の世界を解きほぐすための不可欠な糸口となるだろう。

以上のような可能性を考慮に入れ、本企画では、人間が環境に直接的に働きかける技術的实践を対象とした民族誌的・人類学的研究を取り上げ、そうした研究が直面する困難や課題を踏まえつつ新たな展開や可能性を追究する。なお、本企画では、物理的環境のみならず、文化・社会的あるいは象徴的（超自然的）環境にかかわる技術的实践についても対象とし、相互の差異や齟齬についても積極的に検討を加える。

■プログラム

- ・ 13:30-13:45 「技術をモノ語る民族誌の苦悩と悦楽」 大西秀之（同志社女子大学）
- ・ 13:45-14:15 「試行錯誤する「手」：エチオピア女性土器職人の技術的实践」 金子守恵（京都大学）
- ・ 14:15-14:45 「相互交渉としての漁撈技術：ボルネオ島サマによる漁撈活動を中心に」
小野林太郎（東海大学）
- ・ 14:45-15:15 「技術のオントロジー：自然＝社会人類学の弁証法的相互行為論の可能性」
大村敬一（大阪大学）
- ・ 15:30-15:45 コメント1 後藤明（南山大学）
- ・ 15:45-16:00 コメント2 坂井信三（南山大学）
- ・ 総合討論 16:00-17:00（終了予定）